

企画展「クスルン ムックル オルシペ～釧路のムックリ三代の物語～」を開催 (2024年10月12日～11月24日)

城石 梨奈*

〈本展開催に至るまで〉

本展開催から遡ること1年ほど前、2023年の9月頃に、ムックリ製作者の鈴木紀美代さんと、紀美代さんの“個人史映像”を制作されているハポネタイ代表のUtaEさんからご連絡をいただいた。50年間以上の長きにわたって、釧路地域を拠点にアイヌの口琴・ムックリの製作を続けてこられた紀美代さんだが、「いつまでも製作を続けられるわけではない。そろそろこれまでの活動を振り返り、地域の釧路で知ってもらおう企画を、博物館で何かできないだろうか」という投げかけだった。釧路地域の博物館である当館にとって、地域のアイヌ民族の歴史・文化発信は使命の一つである。かねてより、アイヌ文化担当学芸員としては、地域のアイヌ民族の方から「こんなテーマで発信したい」という要望をいただくことを心待ちにしていた私にとって、願ったり叶ったりのお話だった。開催まで約1年間というところで、あれこれ構想を膨らますことはできなかったが、紀美代さんにはこれまでのお付き合いの中でいろいろなお話も伺ってきたので、この期間でできる範囲の情報と資料の収集をすることにした。準備をするなかで、ムックリに関する企画を実施することについてアイヌ文化界隈の方々からは「ムックリ流行ってるもんねー!」と言われることが多かった。確かに、世界規模で不定期に開催されている「国際口琴大会」の日本開催という動きを筆頭に、2023年あたりからの口琴YEARの風潮のなかで、当館での企画展開催も一連の流れに乗ることができたのかもしれない。さらに折よく、2024年2月にウポボイ（民族共生象徴空間）にて「今日は一日ムックリざんまい!」という1日イベントが開催された。このイベントは、鈴木夫妻のムックリ製作実演、製作道具や世界の口琴の展示、トークセッション、製作や演奏体験、映像上映など、1日では勿体無い、口琴ファンにとっては垂涎の豪華な催しであった（2025年も2月に期間延長で拡大開催）。当館での企画展開催にあたり、このイベントからも多くの着想やヒントを得ることができ、また製作物の貸与などでご協力をいただくことができた。

〈企画展のねらいと構成〉

展示全体のテーマとしては、アイヌ民族の代表的な楽器であるムックリを紹介しつつも、主題はタイトルの通り、釧路地域を中心に、代々この楽器の存在を受け継いでこられた紀美代さんと、祖父母である秋辺福治・サヨ夫妻、父母の秋辺福太郎・トヨ子夫妻の足跡である。ムックリとい

う楽器は、今でこそアイヌの楽器としてかなりの知名度を誇っていると思われる。道内の学校を中心に、アイヌ文化の学習の一環としてムックリの製作や演奏体験に取り組んでいることも一役買っているのだろう。（ちなみに、この製作体験用のキットも鈴木夫妻の「ムックリの鈴木」で製作している。“製作体験”といっても、大変な工程は全て終え、音の鳴りに関係する最後の仕上げの工程を体験する場合がほとんどである。）この企画展に関する調査の中で一番大きな発見だったのは、これまで私が認識していた以上にムックリの継承において紀美代さんとそのご先祖が果たしてきた役割が大きいこと、そして釧路地域がムックリ産業にとって重要な拠点であったということである。ムックリは、アイヌの楽器として全道各地のお土産品店や施設などで販売されているというイメージがあり、少なくとも道内では一様に伝承されてきているものと思われていないだろうか。ムックリ製作者として有名な鈴木紀美代さんが釧路にお住まいであることを知って、私自身は釧路に来る前から、ぜひお近づきになりたいと思ってはいたが、一般的にムックリは知っていても、それがほぼ釧路で製作されている実態に関心を払っている人はさほど多くはないだろう。地元が誇る財産として、その価値をもっと広めたい、という思いがまず根底にあった。

展示の冒頭、第1章では、世界的に見られる口琴という楽器の概要を説明した上で、アイヌ民族の口琴であるムックリの由来諸説や、伝わっている起源譚、和人によるムックリ記録の紹介をした。

第2章では、ムックリの素材と製作工程として、植物製の素材（チシマザサ・ノリウツギ・モウソウチク）のハンズオン展示、「ムックリの鈴木」で現在使用されている製作道具と、製作工程を写真とともにパネル化したものを展示した。この製作工程パネルの作成にあたっては、「ムックリの鈴木」にて製作のお手伝いをされている佐藤幸枝さんにご協力いただいた。

〈近現代のムックリ伝承〉

第3章では、近現代のムックリ伝承の聞き書き記録をご紹介します（表1）。これは、北海道教育委員会が昭和56年度から平成10年度にかけて全道にて実施した調査の結果である「アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査」から、ムックリについての情報を抽出したものである。ムックリに関わる話題は、「8-8 楽器」と「11-1-4 楽器演奏」の項目に出てくるが、そのほとんどが釧路春採、屈斜路、

鶴居、白糠といった釧路管内に居住する方あるいは出身の方の話であり、それ以外の地域である千歳の方は「ムックリは白老に行って初めて見た」と証言している。明治後半から大正生まれ世代のアイヌ文化伝承者による情報が釧路地域に集中しているという傾向は明らかである。ただし、この調査が行われた時期は、少なくとも白老や平取ではムックリが演奏されていたはずではある。白老については、国立アイヌ民族博物館の八幡巴絵さんに執筆いただいた展示用解説文によれば、明治初頭まではムックリが見られたものの、しばらく途絶えていた時期を経て、再び釧路地域から伝わったようだ。

また、釧路地域では、鈴木さんのようにムックリを商品として量産してきた方々以外に、個人用または自分のお店のみでの販売用として作ってきた方々も複数いらっしゃる。本展示で作品をご紹介した諏訪良光さんや日川清さんは、竹製のムックリだけでなく、ノリウツギ製や、鹿角製口琴など、試作も含めて製作されている。演奏については、国際口琴大会への出場より前から、口琴を通じた世界的な交流が塘路や阿寒の方々によって広がってきた。そのことについては本展では詳しく扱うことはできなかったが、このような複数の製作者、そして演奏者が釧路地域で活躍されたことも、ムックリ産業発展の大きな要素となった。

〈関連行事〉

関連行事は、二日間にわたって開催した「ムックリ教室」(製作編・演奏編)および、ムックリ演奏の名手たちを招いての「ムックリフェス'24」の2つである。「ムックリフェス'24」は、紀美代さんの他、釧路地域の演奏者や紀美代さんと縁の深い演奏者として、山本榮子さん、渡辺かよさん、郷右近富貴子さん(以上、阿寒口琴の会)、新藤真奈美さん、木村明日香さん(以上、白糠アイヌ文化保存会)、川上さやかさん、UtaEさん(ハボネタイ)、そしてアイヌ伝統楽器であるトンコリの製作者・演奏者である辺泥敏弘さん(Peteトンコリ工房)の9名をお招きして、その演奏とトークセッションを楽しんでいただくという企画。ムックリという小さな楽器だが、演奏する方によって全く異なる趣きがあること、それぞれのこだわり、演奏への想いなどを分かち合うことができ、大変興味深い内容になったと思っている。

紀美代さんは現在も全道、全国から寄せられるムックリ注文に答えるべく、日々製作に取り組んでおられる。この展示と関連行事を通して、何よりありがたかったのは、紀美代さんの親族や、ご友人の方々が展示や関連行事の会場へ足を運んだりしてくださったことだ。「ムックリの鈴木」のムックリ製作は、若い世代へと伝承されていく兆しが見えつつある。地域の宝として、今後も大切に継承されてい

くことを願っている。イヤイライケレ(ありがとうございます)。



展示会場を訪れた鈴木紀美代さん



ムックリ教室(10月19日・20日)



ムックリフェス'24(10月27日)

表1. 近現代のムックリ伝承

地域	伝承者	発言事項	聞き取り 年度
本別	沢井トメノ 明治42年 本別町育ち	ムククル レクテ mukkur rekte 口琴を鳴らす。	昭和 62年度
千歳	小田 イト 明治44年 長沼町生まれ 石田 ナカ 明治44年 千歳市蘭越生まれ	ムックリというのは、千歳では見たことがないし、ムックリという言葉も白老に行くまで知らなかった。	平成 5年度
白糠	貫塩米太郎 明治45年 白糠町生まれ	うちのおふくろ達がムックリをやっていたので、おれは作るのを商売にしたことがある。	平成 5年度
塘路	島 直 大正4年 標茶町塘路生まれ	ムックリ mukkuri (口琴) は雪裡の八重イタキビシと言う人が塘路に来た時作っているのを見て、自分も真似して作ってみた。	平成 6年度
塘路	島 直 大正4年 標茶町塘路生まれ	生みの母、育ての母、共にムックリ mukkuri (口琴) をやった。でも、当時でも30歳代の人は、もうやらなかったようだ。塘路でのこと。	平成 6年度
屈斜路	日川 キヨ 大正6年 釧路市春採生まれ	<u>ムックリの製作</u> 竹の方が振動が強く良い音が出るが、昔は、サビタの木でムックリを作った。自分の今持っているサビタのムックリは夫の善次郎さんが作ったものだ(※)。 最初は、マキリでだいたいの形を作る。紐を付ける所は、端から人差指1本分の所に紐を通す穴をつける。その穴から指2本分で振動部の始まる所で、そこから細くなる。そこから指4本分で振動する舌の部分の端になる。全体の厚みは、前に作った音の良いものと同じ厚みにする。 それからムックリを魚の油で煮た。今は、シラシメ油[食用菜種油]を使う。サビタでも竹でも油で煮ないと音が鳴らない。 さらに音を鳴らして調整しながら削って行き、完成する。振動する舌の部分は、握る手元の部分をより薄く削る。今でも釧路にムックリを製作できる人が2人いる。 ムックリの演奏に使う紐はオヒョウの樹皮をよって紐にしたものだ。今は丈夫なので魚網を使う。 [※善次郎さんとキヨさんの息子である日川清(1944(昭和19)年生まれ)さんによれば、善次郎さんがムックリを作っているのは見たことがないとのこと。(2024.9聞き取り)]	平成 9年度
虹別	島 マチエ 大正13年 標茶町虹別生まれ	ムックリは塘路に嫁いだとき、初めて見た。虹別にはなかった。姑の杉谷ヨネというばあさんだけが鳴らしていた。ムックリを使わないときは窓のそばに下げていた。姑さんは親グマが仔グマを呼びながら走る音を鳴らせた。サビタの木からマキリ1本で作るものだ。	平成 10年度
屈斜路	日川 キヨ 大正6年 釧路市春採生まれ	ムックリ mukkuri (口琴) は10年以上も持つ。 根曲がり竹でつくる。昔はサビタの木で作った。サビタの木よりも竹のムックリの方が声が良い。 昔、秋辺福松おじさんが私にサビタの木でムックリを作ってくれた。乾かして作る。なかなかサビタの木でムックリを作れる人はいなかった。サビタの木と竹とでは形が違う。 ムックリの形で地方差はない。どの地方でも形は同じだ。	平成 10年度

地域	伝承者	発言事項	聞き取り 年度
屈斜路	日川 キヨ 大正6年 釧路市春採生まれ	ムックリは使わないときに、マタンプシ matanpus (鉢巻き) の横に差しておく。 一度袋から出すとずっとマタンプシに差しておく。 男の人も頭にヤナギの削りかけ (パウンペ paunpe) や木の皮で3本くらい編んだ鉢巻状の頭の被りもの (「冠」と呼ぶ。細い物だ) にムックリを差しておく。この被りものはクマ祭りの時だけ被る。	平成 10年度
屈斜路	日川キヨ 大正6年 釧路市春採生まれ	<u>ムックリ</u> 父親と母親のムックリmukkuri (口琴) の演奏は、息の使い方や紐の引き方が異なる。母の弟のおじさん (秋辺福松) は、男でムックリが上手な人だ。 ムックリは、クマ祭りにやる。男の人も女の人もムックリの上手な人が演奏する。ムックリを演奏するのは、女の人が多い。ムックリを吹くからムックリに合わせて手拍子をして踊って下さい、という。ムックリをしない人は手拍子をする。ムックリ演奏は、ウボボの間にやる。 一年に一回の祭りの時に各村から集まってムックリをする。徹別のコタンにも方々から人が来た。屈斜路 (クッシャロ) でやれば阿寒湖など方々から来る。 誰それはムックリをやりなさい、誰それは踊りなさい、と言ってやってもらう。 ムックリを複数の人がやる時には音を合わせてやる。同じ曲をやるが、息の仕方などが少しずつ違う。 材料によってもムックリの声が違う。5人なら5人がムックリを鳴らしてみても、同じような息で演奏できる人を選んでムックリを吹かせる。	平成 10年度
屈斜路	日川キヨ 大正6年 釧路市春採生まれ	演奏曲名 1) 馬の走る音とか人間のことばとかを混ぜた曲 2) 馬の走る音…息を吸ったり吐いたりすると同時に紐を引くリズムを変える。 3) 人間のことば 4) 母の弟の曲 5) 雨だれの音 (短い) 6) クマの鳴き声 7) ウボボの囃子…ホイヤー ホイオー ホイヤーホー ホイヤー ホイオー ホイヤーホー 悲しい時のウボボで声を出し、ムックリが伴奏をして、これに合わせて踊ったもんだ。 8) ウボボの囃子：再度 9) コタンコロカムイkotan kor kamuy (シマフクロウ) の声…ホーホーホー 10) エトロ ムックリetor mukkuri (鼻いびき) …ホホホ ハハハ ホホホ 昔の人はいろいろな音の真似をした 11) ホウホウ鳥の声 12) 走ったり、歩いたりする音 (サビタ製のムックリで演奏) 13) 手拍子 (竹製のムックリで演奏) 14) ウボボの囃子：再度7番目の曲を演奏 これは本当に古いウボボだ。 15) サビタ製ムックリによる演奏	平成 10年度

(北海道教育委員会「アイヌ民俗文化財調査報告書」より転載)

[]内は引用者注。